



馬耳東風

いささか旧聞に属するが、2020年東京オリンピック・パラリンピック準備に関連したごたごたは、わが国が抱える問題について考える好個の材料であった。

新国立競技場は、選ばれた案が明治神宮外苑の景観にそぐわないという意見や、予算が当初公表されていたよりも大幅に増加するといったことから、幅広い反対の声が上がっていたにもかかわらず、発注元となる日本スポーツ振興センター（JSC）やJSCを所管する文科省は一顧だにしなかった。それが世論のあまりにも強い反対に押された首相の一言でいとも簡単に白紙撤回され、それまでに使った62億円は無駄金となってしまった。「過ちを改むるに憚ることなかれ」であり、白紙に戻したこと自体は結構なことと考えるが、62億円は関係者のポケットマネーではないのだから、このような仕儀に立ち至った責任は厳しく追及されてしかるべきであろう。しかしそのような意見は少数意見に過ぎなかった。JSCの要職にある元首相が、「2,500億円が出せないというのだから仕方がない。」と無然たる表情で語っているのをニュースで見たが、彼には建設費は国民の税金なのだという意識は皆無なのであろう。

五輪エンブレムに関しては、私のような素人には理解できない価値観の世界があるということを教えられた。私の目にはどう見てもベルギーで使われている図案とほとんど同じとしか見えないのだが、「コンセプト」が違うからまったく似ていないのだそうである。発想がどうであれ円は円、四角は四角であり、この円にはこういう意味が込められているから三角であるといっても通用しないと私は考えるのだが、商業デザインの世界では三角

と見なければいけないらしい。しかしこの図案の作者が代表を勤める会社が作ったトートバッグのデザインの何点かが盗用と発覚したあとでは、さすがに作者の主張も意味をなさなくなるだろうと思ったのだが、当事者たちの対応は全く予想外であった。結局、『ネットでのバッシングがひどいので辞退する』との本人の申し出を受け、新たに公募することになったのだが、ここでもその経緯を発表する組織委員会の事務局長（元財務事務次官）は、『どこかの一カ所に責任がある、そういう問題とは理解しておりません。』と言って平然としていた。ノブレス・オブリージュ *noblesse oblige* を持ち出すまでもなく、人の上に立つものにはそれにふさわしい厳しい責任感がなければいけないというのは常識だと思っていたが、今やこのような考えは「ガラパゴス化」してしまっているらしい。そういえば、私が愛する母国、その国の一番エライ人が特定秘密保護法に関して、『この法律のために報道が抑圧されるようなことがあったら、私はすぐ首相を辞めてもいい』と言ったことがあった。そしてそれに対して、「首相を辞めたからといって法律がなくなるわけではないのだから、何の意味もない発言だ」といった指摘は、残念ながらなされることはなかったと記憶している。

今から50年ほど前、「ニッポン無責任時代」という映画があり、その映画で歌われた「無責任一代男」という歌が流行ったことがあった。あらためてYouTubeで聴いてみたが、この歌でいう無責任とは、調子の良い社交性を自らカリカチュアライズした表現であり、言葉は同じでも当今跋扈している厚顔無恥な無責任とはまったく異なるものであった。底抜けに明るかったあの時代の無責任が懐かしい…。

(久)